

漢字文化圏試論(3)

深井 実

3-0 言語は変化する

我々が日頃用いている言葉は変化する性質をもっている。人の一生を70～80年としても、その期間内の変化量は微小であるため個人では気づかないが、何世代も経た後には可成の差となって現われて来る。奈良時代には八つあった母音が次の平安時代には5個に減少している。副詞の「とても」は「とてもかなはぬ」の如く、元来は否定の語と呼応して使われていたが、今日では「とてもおかしい」のように肯定的に用いても少しもおかしくはなく、否定辞の有無は関係がない。

言葉の意味も昔と今とでは異なるものが多い。例えば「やがて」である。徒然草に「ひとりたうべむがさうざうしければ申しつるなり」との招きに「やがて」と答えるくだりがあるが、これは「直ちに(参ります)」の意である。何時の頃、なぜこの変化が起きたのかは国語学の問題であるからここでは論じないが、英語の Presently も「やがて」と似たような語義の変遷をたどっている。古文を学習する際、形容詞の重要単語50個をまず憶えることがコツであると指導する国語学者が居るが、名詞・動詞にくらべて形容詞の語義変化が甚だしく大きいため、そこを重点的にマスターせよとのことである。

この小論の第3部は漢語の語義について考察する。中国から借用された漢語がどのような意義をになって今日用いられているのかを見るのが今回のテーマである。

明治維新後の近代化により欧米の文物が我が国に大量に入りこみ、それ

に合せてヨーロッパ語のもつ概念が漢字化された。例えばフィロソフィーに「哲学」なる漢字を与えたのは西周であることはあまねく知られた事実である。この種の學術語が四カ国語の中に充満しているので、これもまた興味ある研究対象ではあるが、ここでは取り上げない。その理由は長い時間の経過とともに語義が様々に変化して今日に及んでいる四カ国語の言葉を調べるのが主目的であるため、短期間に人工的に造り出され、且つ同じ意味で使用されている言葉は対象にならないからである。

一般に言語の研究では、音韻と文法は割と類型化しやすい分野であるが、語彙を取り扱うとなるとその分類は仲々難かしい。そこで本稿で取り上げる漢語を主として (イ) 四カ国語で異なった意義を持つものと、(ロ) 字音の相違が語義の相違につながっているもの、の二つに限定し、思いつくままに熟語・成句をえらんで考察することとしたい。

日本語と中国語とでは同じ漢字を用いても意味の異なる場合が多く、誤解の原因となることもあるが、日本語と朝鮮語との間でも同様のことが言える。ベトナム語では漢字が表面に出て来ないが、漢字を使いなれているとつい漢字に頼りがちになり、同様の誤解が生ずることもあり得る。このような誤解を避けるのが (イ) の目的である。

また、漢字の多くは複数の字音を持ちそれに応じて字義が異なる場合と、字音が異なっても同じ意味に用いられているものがある。大型の漢和辞典を見ればすぐ分かることである。同じ漢字でも日本語では1個の字音しかもたないのに、声調をもつ中越両語が複数の字音をもち従って意味も異なる熟語のあることを知るにより、漢字への理解を高めるのが (ロ) の目的である。

前回の造語篇では一つ概念を表わすのに四カ国語で漢字の用い方にどのような相違があるのかを論じた。今回はその逆で一つの文字表記が四カ国語でどのような概念をになって使われているのかを考察する訳である。

所が語のもつ意味を正確に記述することは可成むづかしい仕事である。

国語辞典でも英和辞典でも同じ単語を何冊かの辞典に当たって調べてみると、大きい辞典程詳しくなるのは当然としても説明や語釈が同じということは稀で、多少のデコボコが必ずついて廻る。筆者の能力からして日本語はともかく、他の三カ国語の語義となると調査に限界があるため完璧は期しがたく、微妙なニュアンスの取捨は止むをえない。以下に示されている語義は近似的であることをご諒承願いたい。

3-1 四カ国語で語義の異なるもの

四つの言語の中で三カ国語は同義で用いられ、一カ国語だけが異なった意味をもつ熟語もあれば、四カ国語すべて異なる意味で使われている熟語もある。特に細かな分類を立てることはせず、日頃使いなれている単語を取り上げ日本語を中心に解説し、更に他の言語に言及する形で記述して行く。

(1) 仰天は読み方により意味が異なる。ギャウテンと音読みするのが普通で「びっくり」することであり、「天をあおぐ」と読むと空を見上げたり仰向くことであるから全く異質の行為である。びっくりの意味をもつのは日本語だけで「びっくり仰天」と表現がほぼ固定している。他の言語はいずれも天を見上げることで多くは嘆息、大笑いの状態を表わす。

仰 天 ギャウテン yǎngtiān 양천 *ngwōng thiēn*

仰天大笑 yǎngtiān dàxiào 양천대소

(2) 勉強の2文字を見ると誰しも学生時代を思い出さずにはいられない。中国の古典「中庸」に「精を出す」⁽¹⁾ という意味で使われているが、今日、日本語では「学問にはげむ。商品を安く売る」ことである。他の三カ国語では「無理強いする。心ならずも。いやいやながら」であるから日本語とは大きなへだたりがある。中国語では更に「辛うじて」の意味がある。

勉 強 ベンキョウ miǎnqiǎng 면강 *miễn cưỡng*

一方、「ベンキョウ」を意味する中国語は xuéxí (学習), ベトナム語は

hoc tập (学習), 朝鮮語では공부 (工夫) である。

(3) 利口は今昔物語に「口先のうまいこと。たくみに言うこと」で用いられているが、今日では「かしこい」である。親が騒いでいる子供に「おりこうになさい」と言うのは、だまって静かな子であれと命じているのである。しかし他の三カ国語では「口達者、能弁」を意味している。日本語だけが語義変化をおこしたのである。

利 口 リ コ ウ *likǒu* 이구 *loi khâu*

ついでに口の付いている熟語をもう一つ紹介する。閉口は元来「口を閉めること」から「口をきかない。答弁出来ない」の意で更に転じて「困ること」になったものである。中朝両語では原義が残っているが、ベトナム語は辞典に見当たらない。

閉 口 ヘイコウ *bikǒu* 폐구

(4) 関西のある都市に何必館^{カヒツ}という美術館がある。設立者は、定説を「何ぞ必ずしも」と疑う精神を持ち続けたいとの気持ちからこのように命名したとのことである。何必は現代日本語では使用しない言葉であるが、漢文では「なんぞかならずしも」と訓読し、「必ずしもそれだけとは限らない」とか「強いて…するに及ばない」と訳す。

何必去父母之邦 (論語 微子)

何 必 日 利 (孟子 梁惠王 上)

他の三カ国語では何れも「なぜ。よりによって。…することないではないか」というように使われている。

何 必 カ ヒ ツ *hébi* 하필 *hà tât*

上記の美術館名は、日常殆ど使われない言葉が固有名詞という形で存在している例である。

(5) 迷惑は文字通り「まよいまどう」であり道に迷ったり、人を惑わすのが原義であるが、日本語だけは「いやな目にあって困る」ことである。

迷 惑 メイワク *míhuo* 미혹 *mê hoăc*

(6) 士農工商とか四民とかは封建時代の遺物として今日では使わない言葉であるから死語と言えるが、歴史の勉強には出て来る。筆者が問題としたいのは「士」の意味である。日本語では何のためらいもなく「武士階級」であることはわかるが、他の三カ国語では「文士, 学者」, 並びにそれを出身母胎とする「官僚」の階級を意味している。武力集団のおかれていた環境はそれぞれの国の歴史をひもとかなければならないが、日本ではトップの座を占めていたのである。どこの国にも軍事力はあった訳で、その社会的位置づけは日本とは異なっていたことになる。歴史や語学を勉強していてこの字句に遭遇したら、日本語の先入観にとらわれてはいけない。

四 民 シ ミ ン sì mǐn 사민 *té dân*

士農工商 シノウコウシャウ shì nóng gōng shāng

사농공상 *sī nông công thương*

(7) 屯田は漢の武帝の時に創設された制度である。兵士を遠隔の地に定住させ、平時には農耕に、戦時には武器をとって従軍させた制度であった。この語が借用された当初は原義の如くに使われたのであろうが、各国で徐々に意味変化をおこした。我が国では古くは皇室の料地を意味したが、明治時代に北海道開拓のため屯田兵制度が30年ばかり施行された関係で、今日、屯田が地名に残っている。朝鮮では高麗・李朝時代に経費調達のための土地制度の用語となった。ベトナムでは今日では大規模農場, 所謂プランテーションを指す。

屯 田 トンデン tún tián 둔전 *đôn điền*

(8) 物欲は文字通り金品を得たいという欲望であると断定したくなるが、ベトナム語だけは性的欲望であり他の三カ国語と一線を画している。大漢和辞典には「金銭・酒色等の物質上の欲。外物の欲」としか記述がなく、出典や引用も一切ない。

物 欲 ブツヨク wù yù 물욕 *vật dục*

(9) 麒麟は元来、中国の伝説上の動物で、一角獣とも呼ばれているが、

麒麟はおす、麟はめすを意味する語の熟語である。中越両語では今日でも想像上の動物である。日本語と朝鮮語では動物園でおなじみの首の長いアフリカ産の動物を指す。同じ動物を中国語では chángjǐnglù (長頸鹿), ベトナム語では *huou cao cồ*⁽²⁾ (くび高のしかの意) と言う。

麒麟 キリン qílín 기린 kỳ lân

この語には傑出した人物の意もあるため、特に才智のすぐれた少年のことを次の様に言う。

麒麟児 キリンジ qílín'ér 기린아

(10) 童貞は日本語では男について言われる言葉とされているが、国語辞典、漢和辞典を調べてみると男女双方を指すが、主に男について言うこと記述されている。カトリックではこの語は尼僧を意味する。朝鮮語も日本語と同じであるが、男女の区別をする時は、男(남), 女(녀)を接尾語の如く付ける。中国語では男女両方に用いられるが、女性について用いられることが多いと言うから、日朝両語とは逆になっている。所がベトナム語では女性のみ用いられるから我々はびっくりするが、逆にベトナムの人でも日本語では主に男性のことを意味すると聞けばおどろくに違いない。

童貞 ドウテイ tóngzhēn 동정 đồng trinh

(11) 波, 浪, 瀾, 濤はいずれもさんずいへんの文字であり水面の動きを意味するが、波は小さいもの、他の3語は大きいものを意味する。但し瀾は大波ともさざなみとも言われている。これらの語が結合して熟語を形成し、単に海水面の物理的現象から文章・人生・社会の大きな動き、曲折、変転へと意味を拡大して行った。

波浪 ハラウ bōlàng 파랑

波瀾 ハラン bōlán 파란

波濤 ハタウ bōtāo 파도 ba dào

ただ、ベトナム語では波浪、波瀾の2語は筆者の知る限り辞典に見当らず、日本語でも波乱が波瀾の代用となるなど、それぞれの事情が見られる。

波浪警報 ハラウケイホウ

波浪発電 bōlàng fādian

波瀾万丈 ハランバンヂャウ 파란만장

平地波濤 bính dìa ba dào (中朝両語では平地風波と言う)

cuộc sóng ba dào (波瀾にみちた人生)

(12) 棟梁は屋根のむねとはりである。家屋の高い所に在り重要な構造部であることから国家の重要人物、柱石の意となったが、今日、我が国だけが大工のかしらを指すようになった。ベトナム語では梁棟と書くが、白居易の詩にもこの字句が見受けられる。

棟 梁 トウリャウ dòngliáng 동량 lương đồng (21)

(13) 綱も紀も共にいとへんの文字でその熟語の綱紀はどの国語でも「物事のしめくくり、規律」の意味で使用されている。何故この意がいとへんの文字によって表現されているのか知らなくても、日常の言語生活には支障がない。綱は太いつな、紀は細いつなの意で、両方を用いてしめくくることから、国家を治める大法と細則に意味が転じたものである。倒置形の紀綱も辞典にのっていても日本語では殆ど使わないが、ベトナム語ではむしろこちらの方が一般的である。

綱 紀 カウキ gāngjì 강기 cương kỷ

綱紀肅正 カウキシユクセイ 강기숙정

上述した波瀾、波濤、棟梁、綱紀等の熟語は同義語が結合したものである。前回の造語篇の中でも同義語よりなる熟語を取り扱ったが、それらは構成要素の原義が失なわれていないものであった。今回は言語が変化するとの立場から、語義が原義からかけ離れた熟語だけを取り上げた次第である。

(14) 最近のグルメブームで豊かな食生活の中に点心料理という名前が徐々に目につくようになった。点心とは本来は仏教用語で禪家で取る軽食であった。もと一般に朝食を指し、正午前の小食の意から禪家では昼食を指す

こともあると言う。食事の時刻が流動的であったせいか、今日、点心とは朝鮮語では「昼食」を、またベトナム語では「朝食」を意味している。中国語ではお菓子、間食のことである。

点 心 テンシン diǎnxin 점심 *điểm tâm*

なお日本語ではテンジンとも読む。

(15) 気象には各国語とも二つの意味がある。一つは自然現象としての「空模様」であり、四カ国語に共通である。現代生活に密接な関係があり、気象台とか気象観測と言った熟語が出来上っている。以下の叙述に空模様のことはふれない。

他の一つは、まず日本語についてであるが「人の性格」を意味する。然しやや古めかしい言葉と見られ今日では稀にしか目にふれない。その代りに気性が広く使われる傾向にある。朝鮮語は人間の性格を意味する点では日本語と同じである。ベトナム語では「品性。人となり」とでも訳される語であるが古語である。最後に中国語であるが、人間個人には関係がなく「地域や社会の情況、有様」である。気象万千という成句は「いきいきした気配がみなぎる」であるから、中国の人以外は一見して意味がわからない筈である。

気 象 キシャウ qìxiàng 기상 *khí tuợng*

気象万千 キシャウバンセン qìxiàng wànqiān

기상만천 *khí tuợng vạn thiên*

(16) 正気のさた、ごぶさた、地獄のさた、さたを待つ等の表現に出ている「さた」は漢字で沙汰と書くが、共にさんずいの文字から成り立っていて水に関係のあることがわかる。もともとは米や砂金を水ですすいで砂を取り除くことであったが、転じて善悪を区別し理非を断ずるようになり、更に今日使われているような様々な意味をもつに至った。意味の多様性から見ると日本語が随一であるが殆んどが水に無縁である。四カ国語中で水に関係のある使い方は朝鮮語の「なだれ。土砂崩れ」だけである。朝鮮語

にはこの他に「一時に大量のものが集積された状態(例えばごみの山とか人の波)」と「官吏の大量解雇」の二つの意味があるが、前者はなだれの系列、後者は選別の系列であろう。ベトナム語では「解雇すること」である。中国語は「淘汰する。より分ける」であるから原義が残っている。なお、沙汰と似た言葉に淘汰があるが、この語は四カ国語では殆んど同じ意味に用いられている。

この両語を次に並記する。

沙 汰 サ タ shātài 사태 sa thài

淘 汰 タウ タ táotài 도태 dào thài

トーナメント試合は負けた者は去り、勝者だけが残る方式だから中国語では次のように言う。

淘 汰 賽 táotàisài

3-2 字音の相違が字義に及んでいるもの

漢字は本来複数の音を持ち、それに合せて複数の意味をもつものが多い。しかし日常使用する漢字に対しては細かな使い分けはせず、精々2~3個の字音を知っていればこと足りる。中国語とベトナム語は声調を有しそれが語義に反映している場合が多いが、日本語と朝鮮語には声調がない分、一つの字音が多く在意義をになうことになる。ここではまず中越両語の声調が意義の分化をおこしている一方で、日朝両語ではその区別のない漢字を取り上げて考察することとする。

(1) 重は平声では「かさねる」、上声^④では「おもい」の意味を持っている。

平	声	chóng	trùng	ヂウ チョウ ⁽⁴⁾	중
上	声	zhòng	trọng		
重	陽	chóngyáng	trùng dương	チョウヤウ	중양
九	重	jiǔchóng	châu trùng	キウチョウ	구중

漢字文化圏試論(3) (深井)

捲土重来	juǎn tǔ chóng lái		ケンドヂウライ
	<i>quyển thổ trùng lai</i>		권토중래

重大	zhòngdà	<i>trọng đại</i>	ヂウダイ	중대
慎重	shènzhòng	<i>thận trọng</i>	シンチョウ	신중
重商主義	zhòngshāng zhǔyì		ヂウシャウシュギ	
	<i>chủ nghĩa trọng thương</i>	(3412)		중상주의

捲土重来はケンドチョウライとも読む。日本語では一般にヂウとチョウとの間で意味上の使い分けはしない。

(2) 伝は平声では「伝える」、去声では「注釈書。物語」である。

平声	chuán	<i>truyền</i>		デン テン	전
去声	zhuàn	<i>truyện</i>			
伝播	chuánbō	<i>truyền bá</i>	デンパ		전파
遺伝	yíchuán	<i>di truyền</i>	キデン		유전
伝染病	chuánrǎnbìng		デンセンビャウ		
	<i>bệnh truyền nhiễm</i>	(312)			전염병

伝記	zhuànjì	<i>truyện ký</i>	デンキ		전기
列伝	lièzhuàn	<i>liệt truyện</i>	レッツデン		열전
水滸伝	Shuǐhǔzhuàn		古事記伝		코ジキ덴
金雲翹伝	<i>Truyện Kim Vân Kiều</i>	(4123)	春香伝		춘향전

伝(去声)にはこの他に「宿つぎの馬車」の意味があり、駅伝、伝馬等の熟語があるが本来これらの伝は平声の伝とは同じではない。

(3) 好は上声では「良い。立派な」、去声では「このむ」である。ベトナム語では声調の他に、綴り字まで異なっている。

上声	hǎo	<i>hảo</i>		カウ	호
去声	hào	<i>hiếu</i>			

漢字文化圏試論(3) (深井)

好	漢	hǎohàn	<i>hào hán</i>	カウカン	호한
好	意	hǎoyì	<i>hào ý</i>	カウイ	호의
絶	好	juéhǎo	<i>tuyệt hảo</i>	ゼッカウ	절호

好	学	hàoxué	<i>hiếu học</i>	カウガク	호학
嗜	好	shìhào	<i>thị hiếu</i>	シカウ	기호

朝鮮語の嗜は本来シであるが、慣用音のギが用いられている。

(4) 難は平声が「むずかしい。…しずらい」、去声は「災なん。責める」である。

平	声	nán	<i>nan</i>	ナン ダン	난
去	声	nàn	<i>nan</i>		
難	治	nánzhì	<i>nan trị</i>	ナンチ, ナンヂ	난치
艱	難	jiānnán	<i>gian nan</i>	カンナン	간난

難	民	nànmín	<i>nan dân</i>	ナンミン	난민
苦	難	kǔnàn	<i>khổ nan</i>	クナン	고난

中国語に難兄難弟という表現があるが、難の読み方により2通りの解釈が出来る。

nán xiōng nán dì 優劣をつけがたいと言う意味であるが、今日では「どっちもどっち」と悪い意味で使われることが多いと言う。

nàn xiōng nàn dì 苦難をともにした人。

難には上記の他に平声の字音(ナ || ダ, nuó, ㄋ)があるが今は論じない。

(5) 藏は平声が「おさめる。かくす」、去声が「くら」である。

平	声	cáng	<i>tàng</i>	ザウ サウ	장
去	声	zàng	<i>tàng</i>		
藏	匿	cángnì	<i>tàng nặc</i>	ザウトク	장닉
藏	書	cángshū	<i>tàng thư</i>	ザウショ	장서

三	蔵	sānzàng	<i>tam tang</i>	サンザウ	삼장
西	蔵	Xīzàng	<i>Tây Tang</i>	———— ⁽⁵⁾	서장

宝蔵は bǎozàng, *bào tàng* と綴るが蔵の字音がくい違っている。その理由はわからないが、言葉は仲々理論通りにはならないものである。

(*bào tàng* は博物館である。)

(6) 分は平声が「わかる」、去声が「けじめ、さだめ」である。

平	声	fēn	<i>phân</i>	ブン フン ⁽⁶⁾	분
去	声	fèn	<i>phàn</i>		
分	解	fēnjiě	<i>phân giải</i>	ブンカイ	분해
積	分	jīfēn	<i>tích phân</i>	セキブン	적분
分	子	fēnzǐ	<i>phân tử</i>		
—————				ブンシ	분자
分	子 ⁽⁷⁾	fēnzǐ	<i>phân tử</i>		

分子はブンシ, 분자と読めば全く区別がないが、中国語とベトナム語には声調に相違があり意味も異なる。平声系は物理・数学で用いる分子であり、去声系は「ある種の人々」である。

反	動	分	子	fǎndòng fēnzǐ	ハンドウブンシ
				<i>phân tử phản động</i> (3412)	반동분자

(7) 占は平声が「うらなう」、去声は「しめる」である。

平	声	zhān	<i>chiêm</i>	セン	점
去	声	zhàn	<i>chiêm</i>		
占	星	zhānxīng	<i>chiêm tinh</i>	センセイ	점성

占	有	zhànyǒu	<i>chiêm hữu</i>	センイウ	점유
独	占	dúzhàn	<i>độc chiêm</i>	ドクセン	독점

漢字文化圏試論(3) (深井)

(8) 処は上声では「住む。実行する」、去声では「ところ」である。

上	声	chǔ	xǐ	シヨ	처
去	声	chù	xí		
処	世	chǔshì	xǐ thè	シヨセイ	처세
処	女	chǔnǚ	xǐ nǚ	シヨヂヨ	처녀
出	処	chūchǔ	xuāt xǐ		
<hr/>					
出	処	chūchù	xuāt xí	シュッシヨ	출처

出処は上声では「官に就くことと引退すること」、去声では「出典。出どころ」である。

(9) 冠は平声では「かんむり」、去声では「かぶる。首席」である。

平	声	guān	quan	クワン	관
去	声	guàn	quán		
花	冠	huāguān	hoa quan	クワクワン	화관
怒	髮	nù fà	chōng guān	ドハツかんむりをつく	
		nô	phát xung quan	노발총관	

冠	詞	guàncí	quán tì	クワンシ	관사
冠	軍	guànjūn	quán jūn	クワングン	관군
沐	猴	mù hóu	ér guàn	モッコウにしてクワンす	
		môc	hâu nhi quan ⁽⁸⁾	목후이관	

「世界に冠たる…」の場合は去声系である。

以上に見た如く、声調の相違が字義に及んでいるが、日本語にも呉音・漢音・慣用音の区別があって、その使い分けによって意味に相違の出ている場合があるのでその1例をあげる。

(10) 興は平声が「おこる。さかんになる」、去声は「よろこぶ。たのし

漢字文化圏試論(3) (深井)

み」であり中越2語にその区別が見られるが、更に日本語は前者には呉音のコウ、後者には漢音のキョウが対応している。

平	声	コウ	(呉音)	xīng	huang	홍
去	声	キョウ	(漢音)	xìng	hiang	
興	亡	コウバウ		xīngwáng	huang vong	홍망
中	興	チウコウ		zhōngxīng	trung huang	중홍

興	味	キョウミ		xìngwèi	híng vi	홍미
興	趣	キョウシュ		xìngqù	huang thú	홍취

漢和辞典、国語辞典を見ると次のように読み方により意味も異なる熟語が載っているが、筆者とて日常これらの言葉をすべて使い分けているわけではない。

興	感	{	コウカン	感じてふるい立つ
		キョウカン	面白く感ずる	
興	起	{	コウキ	ふるい立つ
		キョウキ	興味がわきおこる	
一	興	{	イッコウ	ひとたび盛んになる
		イッキョウ	ちょっとした面白み	

中国語に字音の区別があるのにベトナム語にその区別のない漢字と、逆に中国語に区別がなくベトナム語では区別する漢字をそれぞれ1例ずつあげる。

(1) 種は上声では「たね。たぐい」、去声では「うえる」である。

上	声	zhǒng	シュ ショウ	종	chúng
去	声	zhòng			
種	類	zhǒnglèi	シュルイ	종류	chúng loại
人	種	rénzhǒng	ジンシュ	인종	nhân chủng

漢字文化圏試論(3) (深井)

種痘	zhòngdòu	シュトウ	종두	chủng đậu
種瓜得瓜	zhòng guā dé guā		종과득과	
百年種人	bách nién chǔng nhân		(中国語の百年樹人)	

ベトナム語の *chủng* は名詞では生物学の種 (シュ), 動詞では「種痘する」の二つの働きを持っている。

(12) 中国語の操の声調には奇妙な点があるが *cāo* 1 音であるとの立場で論ずる。平声は「あやつる」、去声は「みさお」である。

平声	<i>thao</i>	サウ	<i>cāo</i>	조
去声	<i>tháo</i>			
操縦	<i>thao túng</i>	サウジュウ	<i>cāozòng</i>	조종
体操	<i>thể thao</i>	タイサウ	<i>tǐcāo</i>	체조

節操	<i>tiết tháo</i>	セッサウ	<i>jiécāo</i>	절조
----	------------------	------	---------------	----

三国志に登場する曹操は *Cáocāo*, *Tào tháo* である。

中国語やベトナム語には字音の区別がないのに、日本語だけに特有な呉漢音のちがいが意味のちがいにつながる例をあげる。

(13) 封は平声の漢字であるが、大きく分けて「土地」に関する意味と「とじこめる」の意味があり、前者には漢音が、また後者には呉音が結びついている。

呉音	フウ	fēng	봉	<i>phong</i>
漢音	ホウ			
封鎖	フウサ	fēngsuǒ	봉쇄	<i>phong tỏa</i>
封印	フウイン	fēngyìn	봉인	<i>phong ấn</i>

封建	ホウケン	fēngjiàn	봉건	<i>phong kiến</i>
冊封	サクホウ	cèfēng	책봉	<i>sách phong</i>

(14) 中国語には声調により一つの語の品詞を区別していることは見た通りであるが、特に名詞と動詞の区別がある語ではその二つを並べることにより同族目的の表現が可能となる。日本語の「歌を歌う。踊りを踊る」のたぐいである。朝鮮語にも꿈 꾸다 (夢をみる), 잠 자다 (眠る) などがある。しかしこれらは民族固有の言葉による表現であるから本稿にはなじまない。四カ国語列記は出来ないが、中国語だけを数例書きつらねる。

瓦瓦 wà wǎ (かわらをふく)

弾弾子 tán dànzi (ビー玉あそび)

扇扇子 shān shànzi (扇であおぐ)

釘釘子 dìng dīngzi (釘を打つ)

画画儿 huà huàr (絵をかく)

数数儿 shǔ shùr (数をかぞえる)

最後に漢字の字体にかかわる事例をとりあげる。

着は著の俗字であるからこの2文字は同音同義の筈である。もともと著には去声と入声の字音があり、意味もそれに応じて異なるのは当然だが、字体までもがその区別に呼応するかのようになっているのが現状である。今まで考察して来た漢字には字体が関与しなかったが、言葉の長い歴史の間に字体までもが妙にからみついてしまった例として著と着、吊と吊の2組の漢字を紹介する。

(15) 著は去声では「いちじるしい。あらわす」、入声では「くっつく。身につける」の意である。着はあくまで俗字であるが、漢字が表面に出て来ないベトナム語を除き、他の三カ国語ではおおむね入声専用の字体として使われている。その結果、著は去声担当の字体ということになりここにその使い分けが固定したものであろう。

去 声 チョ zhù 저 tré

入 声 チャク || チャク zhuó 착 trưóc

漢字文化圏試論(3) (深井)

著 名	チョメイ	zhùmíng	저명	<i>trí danh</i>
著 作	チョサク	zhùzuò	저작	<i>trí tác</i>
顕 著	ケンチョ	xiǎnzhù	현저	<i>hiền trí</i>

ベトナム語では *trí* の代りに *trước* が用いられる場合が若干ながらあり、上記の著名、著作が *trước danh*, *trước tác* と綴られる場合もある。

一方、入声音の持つ「くっつく。衣服をつける」の意では、ベトナム語の *trước* は殆んど熟語を作らず、辞典を見ても用例が仲々発見出来ない。

粘 着	ネンチャク	niánzhuó	점착	————
付 着	フチャク	fùzhuó	부착	————
着 陸	チャクリク	zhuólù	착륙	————

但し、ベトナム語の場合100年程前に出版された辞典を見ると、*trước* を用いた例が載っていることから過去には存在していたことがわかる。

着 衣	<i>trước y</i>
着 地	<i>trước địa</i>
点 着	<i>điểm trước</i> (火をつける)

日本語も人によっては、又は辞典によっては著にチャクを当て、例えば粘著、愛著と表記する場合がある。

次の4字熟語は日常まったく耳目にふれることのない成句であろうと思われる。

入耳着心	rù ěr zhuó xīn	입이착심
	<i>nhập nhĩ trước tâm</i>	

「一度聞いた事は忘れない」という意味である。

(16) 吊は弔の俗字である。日本語では、弔は「とむらう」、吊は「つるす」と使い分けがほぼ固定しており、特に後者は訓読みすることが多い。

去 声	テウ	diào	조	<i>điều</i>
入 声	チャク テキ	dì ⁽⁹⁾	적	<i>địch</i>

弔橋(テウケウ)は辞典に載ってはいるが、チャーキョーと言われてもす

ぐには理解出来ない程である。ベトナム語には「とむらう」の意味の単語しか発見出来なかった。中国語では簡体字を用いるから字体は吊のみで、それが両方の意味をもっているわけである。

吊	文	テウブン	diàowén	조문	điều văn
吊	喪	————	diàosāng	조상	điều tang
吊	橋	つりばし	diàoqiáo	조교, 적교	————

字音チャク, テキ, 적は「達する」の意であるが, 朝鮮語の적はつり橋, つり鐘等の熟語形成に用いられているからすこぶる奇妙である。正字と俗字の2文字と2字音が入り乱れて使用されている朝鮮語の複雑さを, つり鐘に関して何種類かの辞典で調べてまとめたのが次の表である。なお「つりがね」はお寺の鐘ではなく軍陣につるされる鐘のことである。

漢字		ハングル	조 종	적 종
吊	鐘			つりがね
吊	鐘		とむらいのかね	とむらいのかね
			つりがね	

見出し語として立てられている頻度から考えると, 「吊鐘は적종と読みつりがねの意」, 「吊鐘は조종と読みとむららいのかね」となりそうである。但しこれはあくまでも辞典調査の結果であり, 今日韓国の人達はどの様に使用しているのか, 筆者には不明である。

4 おわりに

3回にわたって関係諸国の漢字, 漢語の様相を極めて大まかに取りまとめてみた。粗描と言っても過言ではない。今後とも調査, 研究を深め範囲を拡大し, より良い成果をあげたいと考えている。その構想には二つの目標があるが, その一つは文字である。日本の片仮名と朝鮮の吏読(りと)は漢字をもとに考案された文字であるから極めてよく類似しており, またベトナムにも字喃(チューノム)と稱して漢字の構成法を真似した文字が

かつて使用されていたことがあった。可成特殊な研究が必要であるが、漢字文化圏論を進めて行く際、素通り出来ない分野である。

他は既述した国以外の中国周辺国家への漢字文化のしんとうである。モンゴル、ミャンマ、タイ、マレーシア等の国の言語にも多数の中国語が借用され、その国の言葉の一部となった単語も相当にある筈で、そのあたりの研究もまた興味あふれるものと思われるが、到底筆者の手の届く所ではない。しかし一寸のぞく程度でもよいかから着手してみたいものである。

多様な漢字文化の恩恵を蒙って生活している我々は、漢字・漢語・漢文・漢詩という字を見た時、日本、朝鮮、ベトナムの言語は中国文化が生んだ一卵性三つ児であるとの認識に立って理解を高めて行きたいものである。

付記

この小論作製に当たりベトナム語印刷の一部について、大修館書店（東京）のご協力を受けました。ここに謝意を表する次第です。

注

- (1) 漢籍からの引用は「大漢和辞典 修訂版」による。
- (2) 漢語ではなく民族固有の言葉には点線を施した。但し日本語は字音には片かな、訓には平がなを用いて区別した。
- (3) この小論が引用する「大漢語林」(大修館書店)の「重」の項には韻目が平、上、去の三つがあるが、細かな記述を避けるため去声は取り除いた。以下にも同様の措置を取った個所がある。
- (4) 呉音と漢音を区別するための記号として||を用いる。||の左にあるのが呉音、その右にあるのが漢音である。呉音と漢音が同一の場合、字音は1個のみを記した。「重」の場合、平声も上声も呉音はヂウ、漢音はチョウである。またたての点線は、字音の差が意味の差となっているグループと、そうでないグループを区別するために立てた。左側が差のあるグループである。
- (5) 西藏はチベットと読むが、これは音でも訓でもないため無記載とした。
- (6) 大漢語林では平声と去声の字音が一致しないが、慣用音も使用されているので、

漢字文化圏試論(3) (深井)

ここでは同一に扱った。

- (7) ベトナム語の分子には *phân* と *phàn* との間に若干のユレがあり、辞典によっては規則通りになっていないものもある。単なる誤植なのか、正書法に問題があるのかは不明である。
- (8) この冠は動詞であれば *quán* となる筈である。 *quan* であることは名詞であるとも考えられる。 *mũ* (かぶりもの) と説明している注釈書があるからである。
- (9) 大漢語林による。 p482